

総合討論

司会：原 洋之介・足立 明

原 いま、この「総合的地域研究」重点領域の狙いの一端を海田さんが見事に話された。ちょっと余談だが3月2, 3日に今年度の総合シンポジウムを東京で開く。そのときにいま、海田さんのいわれたような問題をめぐって議論する計画があるので、是非ご参加いただきたい。

皆さんの報告を聞いて、まだ質問したいことが残っていると思うので、何はともあれ、レッセフェールで、いろんな方に発言を願い、報告者には受け答えをしていただきたい。その後、いくつか論点を絞り、議論をまとめる方向で進めたい。「発展の地域性」はいったいどういうことなのかというようなことを最終的には議論してみたい。

荻野 上田さんに伺いたい。この話の最初の方で、森林破壊の問題を一般論として取り上げ過ぎているのではないか。どういう状況の中でそれが起こっているのかということは、きちっとしておかないといけないと思うが、そういう点に関して、わりあい現代的な状況の中で議論されているような気がするが、その背景を説明願いたい。

上田 一般論の中で念頭にあったことは、いままで森林についての議論の中で、人間の領域が増えると森林が減る、逆に森林を増やすためには人間の領域を減らさなければいけないという非常に単純明快な二項対立といった議論があったのではないか。人間側が少しでも森林に入るということは、森林破壊に結び

つくという形で、否定的に考えられる。あるいはそれがもっと敷衍されると、森林を増やすのは良い文明であり、森林を破壊するのは悪い文明というような二項対立。近代を生んだ西欧文明と森林に根ざした文化を生んだ日本やアジアの文化とを対立的に位置づける議論も生まれ、議論が単純化されていく状況がある。私自身としては、このような思想状況に非常に危ういものを感じる。日本の中で環境問題が盛んに論じられる時期に、こういう単純明快であるがゆえに、わかりやすいが危険な議論がなされてきた。

もう一步それを乗り越えるためには、人間を含みこんだ生態環境というのか、人間がどういう形でどういうふうに関われば、森林も定常的に持続し得るし、人間の側も持続し得るか、森林も人間の側も共に発展するような発展プロセスのモデルが考えられるかという議論が必要となる。先ほど秦嶺山脈の事例の中で言ったように、柞蚕から繭を作るという産業などがそうである。私自身はそれが過去のものではないと考える。

現在、中国において、いろいろなNGOが森林の再生をやっている。私自身そのことを否定はしないが、中国に長く関わってきた者として、その有効性が十分に生かしきれてないのではないかと感じを持っている。それはなぜかということ、中国人自身、あるいはそこで生きている人間自身が、自分のやり方を見つ

けていく作業、プロセスがどうも抜け落ちているからである。森林のことをよく知っている日本人が、森林を破壊し続けてきた中国人に何か教えてあげる、あるいは森林を作らせてあげるという態度がどうもあるような感じがする。中国の歴史は森林破壊の歴史ではあったが、その歴史の中に分散的ではあるが、生態的な環境を含みながら発展を模索したような事例を捜し出せる。中国人はプライドが高いので、日本人がこういうことを教えたというのではなく、中国人の祖先の中にそういう人物がいたということを見出し、再評価していったらどうかとアドバイスをすることが、中国人ではない私が中国人に対してできる一つの在り方なのではないかと考えている。

非常に微妙な、例えば標高差によっても変わってくるような生態学的環境の中で生きた中国人の先人達が、いわゆる定常的な経済活動、生態環境を含みこんだ定常的な動きというものをいかに模索していたのかを見る作業を私自身は続けていきたい。その中で先ほどいったような森林の文明対砂漠の文明、伝統対近代などの単純な二項対立というものを乗り越える手掛かりが得られるのではないかと考えて、こういう議論をしたわけである。

柳沢 加納さんは1930年代の意味づけとしてプランテーションの後退と小農生産の前進ということを言われている。これを説明していただきたい。加納さんの議論は、それまでは宗主国（イギリスとかフランスを含めた）で

あったが、全体として東南アジアがアメリカに吸引されてアメリカとの結合を深めていく、それまでヨーロッパを中心に引っ張られる形でのプランテーションの発展が、今度はアメリカに変わる。したがって東南アジア自身、あるいはアジア自身は従属的な中心でしかあり得ないと理解していいかどうか。

果たしてそうだろうか。角山さんの話とも関係するが、この1930年代は、アジアが固有の発展能力をつけてくる段階ではないかという感じがする。したがって、このことと「プランテーションの後退と小農生産の前進」ということは関連していないか。インドのアウトルキー化ということが、特殊インド的なのか、他の国にはないのだろうか。そういう点では1930年代が、第二次世界大戦後のアジアの展開の準備期間として、ある意味で西欧からの切断と固有化を模索していた時代ではないだろうか。その一つのキータームは消費の転換だと思っているが、その点を含めて、この小農生産の前進などについてご説明願いたい。

加納 今日報告ではゴムを強調したが、その他にもサトウキビ、紅茶、コーヒー等でもすでに小農生産の前進が存在する。1910年代頃から姿をあらわし、1920年代頃にはかなり広がってくる。しかし、どちらがメジャーであるかは、どの作物をあげてもプランテーションの方がメジャーであるというのが1920年代までである。

ゴムについては、マラッカ海峡沿岸の最優良地は、マレー半島側ではイギリス系プランテーションが押さえ、スマトラ側でも、オランダばかりではなく、イギリス、アメリカ等、いろいろな国籍の資本が入り込んで、一番海に近い地域をおさえている。そして、少し奥の方にスモールホルダーが展開していく。マレー半島のゴムプランテーションの製品は、直接マレー半島の港から輸出先へ送られる。しかし、例えば蘭印のものはシンガポールで一度加工して再輸出される。そしてスモールホルダーのものは、ほとんどが一旦シンガポールへ集まる。

ジャワの砂糖の場合は少し複雑で、1920年代には東部ジャワで小農が作ったサトウキビを、製糖工場が買いつけて加工するという形が出てくる。これはオランダの植民地政府が抑圧するが、30年代になるとプランテーションが経営的に行き詰まって、閉鎖、休業が増える。ところが小農の方は労賃に食い込むような状況でもやっていける特質があり、一旦は後退するが回復期に入ると、スモールホルダーの方は1920年代末の水準にかなり早く戻り、30年代には越えている。それはどうしてか。ジャワのスモールホルダーの砂糖は国内市場が主で、しかも非常にローカルな黒糖である。そういう輸出市場と違うローカルな市場圏で30年代のジャワのスモールホルダーのプロダクションは広大する。

戦後になるとゴムにしても、砂糖にしても、

完全にスモールホルダーに変わっていく。タイの場合は完全にスモールホルダーである。プランテーションは30年代から終わりの時代に入っていく。

中村 柳沢さんと加納さんの討論の内容に関連して質問したい。加納さんの報告は、こういうふう整理されてしまうと、そこからの展開の仕方が難しくなり、海田さんのようにオルタナティブな構想をしろなどと言われると大変だと思う。その一つの手掛かりが先ほどの小農ではないかと、そこのお尋ねしたい。

西側のメトロポールに結ばれた形でのいろいろな市場の形成とは別の市場があり、物が流れている。鶴見良行さんが『ナマコの目』でいろいろ書いている。特産品（フカひれ、燕の巣等）のような物の流れと、プランテーションに象徴されるような経済活動と、どういふふう相互に関連させて理解するかと考えると、後者の方はまず土地の確保、労働力の移住、銀行制度のようなもので決済する、投資するとか、市場を維持するための一定の暴力装置が必要で、その暴力装置という形で植民地強制、あるいは軍隊という不可欠な要素が必要になる。もう一方の地場の人達が荷物を担いで、あるいは小舟に乗せて運んでいくような種類の特産品や日用雑貨の動きは、同じ市場でも、その市場を安定的に維持するための暴力装置、特に国家とか植民地の権力を必要としない。

小農の方からプランテーション市場とは違う形の交流市場に向かう力が出てこないか、それが海田さんのいうオルターナティブなものに繋がるのかどうかは、なお難しい問題が沢山ある。その辺の展望について少し話をしたい。

加納 今日の話は、統計資料を使ってマクロに押さえていく方法で、これは誰が作ったデータ情報かという、支配者の作った情報であり、支配者の目線で見ざるを得ない。目線をどこに置くかということが重要で、目線の位置を地面に近づけて見ていかないとけない。

ところで、ジャワの砂糖のことに、誰が東南アジアへ持ち込んだかという、多分中国人である。華南からの技術がもたらされ、17世紀、18世紀頃からまずジャワで展開し、それを引き継いでオランダ人がプランテーションに発展させた。それまで砂糖は、ジャワ人はココヤシとサトウヤシから作っていた。いずれも花の一部から出てくる樹液を採って煮詰めれば黒糖ができる。その生産は非常に古くから展開していたが、統計などには一切出てこない。しかし実際にローカルな市場に行けば、どこでも売っており、日常の煮炊きは全部それでやる。それを全部集計すると、おそらくものすごい量の生産になると思う。それに着目したウォーレスは「東南アジアは、生態的にはサトウキビを作るよりもヤシから砂糖を作る農園をいっぱい作るべ

きだ」と書いている。

独立戦争当時、オランダの製糖企業も華僑系の製糖工場もほとんど閉鎖を余儀なくされるような状態になった。ところが農民はサトウキビを作り続け、サトウキビの生産面積が植民地時代より増え、黒糖に回してもまだ余るといので、農民たちが協同組合を作って政府にプレッシャーをかけて、製糖工場の再建を国の融資でやれという、まるで攻守とところを換えたような話である。農民の方がイニシアチブをとって製糖産業の再建が行われたのであるが、独立後、砂糖の輸出はできなくなる。人口が増え、国内消費が増えるということ、輸出余力がほとんどなくなってしまい、むしろ輸入するくらいになってしまう。市場構造が転換した後のサトウキビ生産の担い手はスモールホルダーに完全に切り替わる。大木 上田さんの「おわりに」というところで、中国文明の森林に対する恐怖感という大胆な表現があり、これは『孟子』に書いてあると解釈していいと思う。本当に中国文明は、森林に対して恐怖感を持っていたかどうか気になる。それは支配者から見て、恐怖の対象であったのか、一般住民も本当にそう思っていたのかということが気になる。というのは、ジャワでもそうだが、王様たちはいつも森林を恐怖の対象として見ており、森林にさしかかると恐ろしがる。ジャワの人々は森とともに生きているわけで、別に恐怖心は持っていない。

森林破壊は悪であるという考え方が出てきたのは、最近のことである。産業革命はすなわち近代文明の自然に対する克服、勝利なのだという意識がヨーロッパ文明の中で続いており、いま少しばかり反省が現れてきている。中国で森林破壊＝悪というような考え方を、誰がいつ頃したのか。開発、発展という枠組みの中で、森林の減少が進行し、それは肯定的にとられてきたのではないかという印象を持っているがどうだろう。

上田 少なくとも照葉樹林に対する恐怖感は、中国文明を担っていた漢民族は、支配者であれ、庶民であれ、共通して持っていた。基本的にいうと、中国文明を生んだ中原と呼ばれるところは、落葉広葉樹林を中心とする森林であり、そこで農業生産を行い、森林を伐採し、人間の領域を拡大していった。それに対して、南方に広がる照葉樹林は、全く質的に違う印象を漢民族に与えたのではないか。そういう議論を生み出すような雰囲気をも中国の古代の様々な断片から伺うことができる。

戦国時代以降の森林破壊を見ると、平坦地における森林は、戦国時代にはほぼ開発し尽くされて、それ以降の漢民族の主な開発の中心地は南方に移っていくが、漢民族はなかなかその森林の中には入っていけない状況が長く続く。宋代以降になって、ようやく水利開発能力、土木技術などをもって、河川流域からだんだん森林を開発しながら、山の上の方に入っていける状況になった。唐代くらいまで

は、漢民族は照葉樹林を目の前にして、どうも手が出せない。それが一つの恐怖感に繋がるのではないかという印象を受ける。

いま我々が考えている中国文明は中原で発達した漢の文明であるが、それに対して、別の要素として許行に代表されるような楚の流れというものもあったのかも知れない。

やはり文明というのは基本的に森林の側から見れば破壊的である。鉄道線路を引くことによって、森が開発される。それが悪ではなく、誇らしいものだということも文明であるがゆえである。しかし、例えば逆の立場で先住民の側から見ると、それは逆転している。アメリカにおいても、アメリカの森林を伐採するというのは、基本的に善という形で歴史的に述べられているが、インディアンの側から見ると、全くそれは別である。その辺りを敷衍していくと、文明に対抗しているのは先住民だということになる。

戦国時代の議論を読むと、現在我々が議論しているようなことは、すでに出尽くしているという感じを受ける。特に環境に関する議論も、孟子と許行の議論の中で展開されている。しかし、現在我々が中国の思想として引き継いでいるものは、孟子の立場、文明論者のほうの立場でしか見ていないといえる。

原 「発展の地域性」というタイトルに沿って議論がまとまることを願って少し議論してみたい。今度私が書いた『地域研究と経済学』のはしがきに以下のような文章を書いた。

「地域研究というのは対象社会の持つ最も大きな特徴を明らかにすることを目指す学問である。そのときには、地域とはどんな範囲なのかということも議論することが非常に重要である。」この重点領域研究の中で使われた言葉でいうと、他から分けられた存在、他からは区別された存在として地域を括りだしてみろという作業が必要である。ところが、今日の話のように、地域というのは分けられただけでなく他と繋がっており、この繋ぐ論理を明らかにすることが必要だ。そのことに関して、その繋ぐ論理と分ける論理をこえて、それをもう一回括る論理も必要だという議論もある。「分ける、繋ぐ、括る」という、立本さんが使われた言葉をキーワードとしていくつか議論がされてきたわけである。

極端に言うと、現代世界の中で、この繋ぐ論理だけが強調されているのではないか。つまり、世界を繋ぐ論理というのは、自由競争しかない、自由経済競争で世界を繋いでしまうという議論が出てきている。例えば、最近ジャカルタで開かれたAPECの背景にあるアメリカの考え方は、クリントン政権のブレーンのエコノミストが書いたものを読むと、はっきりとしてくる。つまりAPEC地域の中を完全に自由貿易で律するという議論になっている。つまり繋ぐ論理として自由主義だけが極端に出てきているのが現代である。そういう中で「発展の地域性」を未来思考で考えていくときに、イデオロギーとしての自

由主義という問題に思いをめぐらせないといけないのではないかと考えている。

そういう大きな脈絡を前提に、2～3コメントをしてみたいと思う。そこで自由主義という普遍論理、繋ぐ論理としての自由主義を、別の形で表現してみたいと思う。東京大学に岩井克人さんという経済学者がいる。彼は「資本主義は一つの普遍論理のメカニズムでものすごく力が強い。資本主義は各それぞれの社会の持っている個性を、つまり地域の持っている生態系の条件とか社会条件とかいろんな個性を経済上の1個のスカラー量、すなわち利潤率に差異化してしまう。利潤率の差、価格の差という形に差異化してしまう。しかし、各地域はそれに抵抗している。その抵抗というところに個性が出てくるのではないか」といった発言をされていた。岩井さんのこの議論の中に一つのヒントがある。実は昨日、角山さんが似たような抵抗という言葉が使われた。

加納さんは現代のAPECに関わるようなアジア地域を律する経済システムは1920年代から30年代にできたと言われた。その通りだと思う。しかし、「発展の地域性」を考えていくとき、その当時あった日本の経済学者の間での、発想の差に思いを馳せる必要があると感じた。

当時、日本資本主義論争を行った労農派と講座派はともに、政治的に弾圧されて言論の自由がなくなる中で、国策としてのアジア研

究にシフトしていった。しかし、アジア認識において、この両派の間に見方の差があるのは重要な点だと思う。アジアに起こっている経済発展を広域経済圏の成立という形の自由主義の論理の拡大、普及という形で理解したのが、労農派の系譜に属する宇野弘蔵である。ところが他方、講座派の論客であった山田盛太郎は中国に行き、中国の小農、家族農業の強さに驚き、その重要性に言及している。

システムとしての資本主義は普遍である。しかし地域社会によってその発展形態に何か違いが出てくるのではないかといった問題を考えるヒントが、小農とか家族農業、あるいはコミュニティーという問題にあるのではないのか。地域の持っている個性を明らかにすることが「発展の地域性」ということを考えるときに重要である。この点で、講座派の論客のアジア認識を見直す必要があるのではないか。

中里さんの報告を聞きながら、こんなことを考えた。イギリスがインドの統治をしたときに、ロンドンで植民地官僚を養成する学校が作られ、その中で経済学者が、植民地官僚になる人に経済学の講義をしていた。その中にマルサスらがあり、インドにとって一番肝心なことは制度の改革であり、土地の私的所有権を与えれば、個人がそれを巧みに利用して市場経済を発達させると議論していた。単純にいうと、私的所有権さえあれば、後はレッセフェールで発展するという経済学を教

えていたようである。ところが彼らの後任となったリチャード・ジョーンズは、前任者の自由主義的な経済学を否定し、インドは私的所有権を与えたくらいではだめで、インドにはインドの個性があり、それをめぐる発展というものを考えるべきだという講義をしている。少なくとも我々が「発展の地域性」を考えるときに、この時代にイギリスで行われた経済学者の論争に思いを馳せておく必要がある。

経済発展というのは市場メカニズムが実現させられていくことであると定義することもできる。加藤さんは野菜と家畜市場とでは、取引されている財が違うので形態が違うというおもしろい話をされた。同時に国家が市場へ介入するに際して、2つの間に差があると話された。

国家が市場に介入していくというのに2つのタイプがあるように思う。一つは、商売をやる権利を与えてやるから税金をよこせといった介入であり、国家財政の維持のための介入である。もう一つは、市場秩序維持のための介入である。市場というのは民間の人間が好き勝手に自らの儲けを求めて経済行為をやる場所だが、放っておくと無秩序になり、独占が生じてギルドとか、騙しあいをすることが多い。そのとき、市場秩序を維持するために、ある程度公権力の介入が必要と考えるのか、あるいはレッセフェールに放っておけばいいと考えるのか。この辺りに地域社会の

差があるのではないか。例えば、中国というのは市場社会だと思う。イスラーム社会も基本的に商業社会だというイメージを持っているが、中世都市の誕生以来、市場は放っておくとギルドになったり、騙しあいをしたりするから、市場秩序の維持のために市場監督官を派遣して、公権力が介入すべきだという考え方が常にあったようである。中国の場合はどうだったのであろうか。いずれにせよ、そういう公権力の側が、民間人が勝手にやっている経済行動をどう見ているかという点が、市場経済発展に個性をもたらす原因になるのではないかと、仮説的に思っている。

上田さんの話だが、「発展の地域性」にエコロジーが強く関係していることは確かである。これに関しては3月のシンポジウムで徹底的に討論してみたい。ここで上田さんをお願いしたいのは、中国の政権、公権力というのは、市場秩序をどう見ていたのかということも聞かせて欲しいということである。中国、中東は、古代から商業社会として豊かに発達してきたところだというイメージを持っており、その点だけ見ていると両者は似ている。ところが中国とイスラーム社会は、どこか違うのではないかとも思っている。中国と中東いずれもネットワーク社会と言われるが、その差異を議論しておかないと、「発展の地域性」を考えると少し穴が開くかと思っている。

「発展の地域性」という言葉、あるいはそ

ういう概念をどう議論するのか。発展というのは世界システムとリンクなしにあり得ない。経済学者はそう思うし、私もそんな気がしている。そうであれば、発展の地域性、地域の個性を論じること自体に意味があるのかという問題が出てきそうである。

川勝 いまの話にも関わらず、普遍論理と個別論理、労農派と講座派、新古典派とモラル・エコノミーといった二項対立図式がある。それは世界のユニットの捉え方と関係してくる。ところで、原さんご自身は「世界システム」自体の地域性をどう考えているのか。ある地域の地域性がヨーロッパの「世界システム」に対する抵抗から出てくるとすれば、ある地域の地域性によってヨーロッパの「世界システム」自体の地域性が浮き彫りにされ、「世界システム」が相対化されるという側面が出てくるのではないか。

原さんの趣旨説明の中に、地域性は西洋起源の「世界システム」の浸透を重要な契機として生起したと書かれているが、これは若干不正確だ。「世界システム」は、ウォーラー・ステインの用語だと思うが、彼の用法によれば「世界システム」は古くからあり、漢帝国もローマ帝国もみな「世界システム」である。Modern World System 「近代世界システム」は、旧来の「世界システム」が政治帝国であったのと違い、経済を中心にした、いわゆる資本主義的世界経済のことを指しており、従来の政治中心の「世界システム」とは区別

されている。それが16～17世紀に成立したと言っているわけで、その時点で他に「世界システム」があったということは両立する。

「近代世界システム」について斯波さんが言われたように、17世紀くらいから議論することができる。その頃には銀の流通等々で世界が経済的にリンクしているから、世界大の問題が立てられるわけである。

では、「近代世界システム」自体の地域性をどう考えるか。これはいままでの報告からも抽出できる。

加藤報告では、野菜市場では世界性というよりもローカリティーが出てきており、家畜市場は国家システムと関係しているとのことであり、これは物の流通の仕方が特定のシステムを作り上げていくということ、ないし財とシステムとの間に相互関係があるという議論だ。

中里報告は植民地支配が一枚かんでいるが、その中で、ベンガルは綿の生産地として「近代世界システム」と関わる。加納さんが日本と東南アジアとの関係は1930年代の後半に出てくると言われた。逆に言えば、1930年代まではエジプトからインドを経て東南アジアにいたる地域——環インド洋——はヨーロッパ地域、つまり「近代世界システム」と深い関係があるということである。

一方、上田報告は、18世紀後半期の中国とイギリスにおける製鉄産業の同時平行性を示唆しているが、それを繋ぐ論理はない。それ

は中国が「近代世界システム」とは別個の地域空間であることを示唆している。斯波さんによれば、江南地域の経済センターが域内に拡大していったとのことであり、それが人口増大を18世紀にもたらした。増大した人口は、上田報告では、中国の内部に入っていくところだけを見ている。だが、人口は南方にも動き、海外に流出した。更に人口だけでなく、江南地域経済センターの経済システムは朝鮮半島にも、日本にも伝播した。日本も17世紀に急激な人口増大を経験するが、18世紀は人口は停滞したが経済発展が起こった。つまり東アジア域内における同時平行性を想定できるのだ。

それらが何を示唆しているのかというと、原さんの言われる「世界システム」、ないし普遍論理を相対化できるという議論だ。つまり「近代世界システム」の地域性を明らかにする議論に繋がっている。それはヨーロッパとは何かという問題である。柳沢さんが消費の転換が発展と関係していると言われたが、これは重要である。中村さんがナマコの話がされたが、ある物を使う、使わないということが地域性と関連している。綿にしても、砂糖にしても「近代世界システム」と不可分である。初めから普遍性が存在しているのではなく、特定の世界商品の流通システムを作り上げることが「近代世界システム」の論理ではないか。では、そのようなシステムを作り上げる商品はどこから来たかということ、アジ

アから来た。さらにそれがアジアでもイスラム圏と関連している。そのことが鮮明になれば、近代世界システムとイスラム圏のダイナミズムを探ることもできる。そういう歴史的なダイナミズムの中で「近代世界システム」の地域性を浮き彫りにできるわけだ。

以上のことから、趣旨説明では普遍論理として始めから前提にされているかに見える「近代世界システム」を相対化する論理の可能性、近代世界システム自体の地域性をどう考えられているのかを原さんに問いたい。それは報告者に対する質問でもある。

桜井 この「発展の地域性」というのは、発展の方法の地域性なのか、発展の内容の地域性なのか。「分け登るふもとの道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな」という西行法師の歌があるが、市場経済が唯一の発展の方法であるというような議論に対しては、勿論それを考え直そうということが趣旨であろうと思うが、そうであれば、およそスターリンにしても、ヒットラーにしても、スカルノにしても、「発展」ということだけは言ってるわけである。お百姓さんにどういう生活がしたいと尋ねれば、オートバイが欲しい、Gパンが欲しいというのは決まっているわけであり、どういうものを発展のコンセプトとして地域の方は考えているかということと、それに至る過程に地域性があるということとは全然違うことだと思うが、その辺を明確にしないと、システム論ばかりになるような気がする。

今岡 この議論の中で、戦後一つの経済ユニット、ないしは国のユニットになってきた主権国家を、地域としての単位と見る議論は一回も出ていなかったと思う。開発、ないしは経済発展を市場化と考えると、主権国家であるということは、明らかにコロニアル・レッセフェールである。そこでのユニットは明らかに違うわけで、通貨発行権、関税自主権を持つ徴税権は前からあるが、そういう国家全体が一つの経済の市場経済化、ないしは市場と公権力との関係等々を基本的に変えるユニットである。それを発展と固有性というときの一つのユニットとして考えるのかどうか。こういう質問をするのは、この地域研究者の集団の中ではタブーであるのかどうか。

染谷 「発展の地域性」の趣旨説明は原さんが書かれたのだろうか。私は文化人類学、ジャワの文化人類学をやっておりますが、その立場からすると、これは大変素直に読める。ジャワには固有の価値体系があり、それに基づいて生活していくことが、彼らなりの発展である。つまりジャワ社会における独特の発展のあり方、ここでは社会構成原理という言葉が使われているが、社会構成原理とか、行動様式、思考様式の根底にあるこの価値体系、それに基づくところの発展の形式というのが考えられている。しかし、先ほどの原さんの説明はこの趣旨説明の文章と随分違いがある。どうして変わっているのか説明願いたい。

足立 いまの発言は、おそらく桜井さんがい

われた発展の内容と、発展へのプロセスの問題に関わっている。またそれとも関連するが、川勝さんが世界システムと地域性の問題を提起されているし、今岡さんが発展を考える際のユニットとして、国家の問題を問うておられる。これらの点について、原さん、説明願います。

原 染谷さんからの質問ですが、書いたのは僕だが、これは立本成文さんの文章の引用であることを告白しておきます。私が考えているのは、人間社会の中で発展とか市場経済化とかというのは、なるべく人間に好きにさせるということである。好き勝手に行動する中身は、その人たちの持っている文化、価値観によって違ってくる。

桜井さんの問題提起に対しては、私個人が考えているのは道筋の地域性の方である。発展の内容に関しては、まだアイデアが浮かばないのが正直なところである。今岡さんが言われた国民国家というのはむずかしい問題で、実際に経済開発を実行し、イデオロギーを持ち出したりするのは、政府であることは確かであるので、国民国家という枠組みをどこかで前提にしないと非常に議論がやりにくいと思っている。川勝さんが言われた近代世界システム、これに関してはあと1年考えます。「発展の地域性」を道筋の方で考えていることを越えて、内容まで含んだような地域の個性をもう少し議論しないと、川勝さんの質問にはうまく答えられない。

足立 このシンポジウムでは、これまで「発展の地域性」ということについて、経済史を中心に検討してきたが、その中であまり表だって議論されなかったのは文化である。しかし、発展の問題を文化か、経済かという二項対立で考えると全然話にならない。つまり、水島さんが指摘されたかと思うが、文化も経済も複雑に絡まった運動として、発展を考える必要がある。このような視点から具体的に見てゆくと、桜井さんの言われた発展の内容とプロセスの問題にも繋がってゆくのではないか。水島さん、運動として発展を見ることについて、もう少し聞かせてほしい。

水島 まず世界システムという場合に、従来市場という動きの中で、財とか商品の動きが問題になっていた。ところが現代世界システムの中では人の動きがかなり入ってきている。そうした移動の中で、それぞれの地域に人間がまるごと移って行って、自分が以前いたという意味での旧世界ともまるきり違うような秩序がどうもあるらしいということに、いろんな人が気づいた。そこはかなり危機感を抱くと同時に、現実的にいろんな問題が起きてきている状況がある。

市場原理が強いと言われるが、強いのではなくて、優れているという考え方があり、そういうものに対して、アジア社会は優れている、劣っているというような価値観で見えてきたような気がする。アジア社会の過去の歴史の展開の中には、近代的な意味での市場の原

理とは別の形態で財の交換の仕方があり、再分配の仕方があった。そういうものにもう一度目を向けて、オルタナティブな形で、むしろ今後どうあるべきかという考え方から、もう一度見ていくという視点をとっていきたい。

運動という質問に戻ると、運動という意味では、ユニットの問題、担い手の問題、どういう方向にいこうとしているのかなど、いくつかのことを考えている。なぜ運動として捉えないといけないかという、例えばカーストの場合、まるきり従来のカーストの秩序体系と関係のないコミュニティーがあったのに、それがいつの間にか上のほうから枠づけられ、カーストシステムの中に無理やり位置づけられてしまっていく。それと同じことを我々もしている。それと同じように、我々が地域単位で分けるというときに、そのもの持っている原理で分けるのではなく、平面的に上から見て分けることによって、いままでの世界観の中で素直に理解してしまう。そういうことに対して、運動ということを強調することで、別の原理が出てくるのではないかと思っている。

染谷 原さんの私に対するコメントへの質問だが、原さんは矛盾したことを言っておられる。それは、最初は「好きに行動させるもの」と言われ、その後で「どの人間もオートバイが欲しい」と断定された。どうして「人間誰でも」というふうには断言できるのか。価

値観が多様であれば、「あんなものはいらない、これが欲しい」という主張だって認めなければならぬはずだ。原さんが結局おっしゃりたいことは、普遍へ思考する経済学の論理ではないか。私は必ずしも国民国家を一つの単位としない、むしろ文化的な単位、民族という単位、あるいは王国、ジャワなんかだと王国というのを一つの単位で考えるわけである。それを一応設定すると、一つの基本的な価値体系を持った社会として、固有の価値を実現していく。それを発展と言うならば、それぞれの発展がある。経済学者がというような単一的な非常に単純な普遍主義的な発展というのは受け入れられない。文化人類学をやる立場からはそう考える。

関本 私も同じ文化人類学をやっているが、単位問題というのはとても難しく、とても「どことこの民族や何々人やらはこういう固有の価値を持っている」とは言えないのが、いまの時代だと思う。様々な個人や集団が民族や国民の名の下で、いろいろな主張をするのが、その背後に誰もが客観的に納得するような確かな伝統や単位があるとは言い難いと思う。これまでの議論の中でやはり問題が残るのは、地域の設定だと思う。地域を設定するのに、例えば2つの対照的なやり方がある。非常に客観的な指標をとって、地域を分ける基準を考えてしまうか、あるいは客観的に地域を区分する基準を考えることはやめて、自分が単位を見つけて、そこに自分の価値や主

張を試すこともできる。大事なのは自分の基準がはっきりしていることだ。私の考えでは、人の動きというのが物の動き以上に、あるいは同じくらい重要なのがいまの世界だと思う。例えば、最近欧米の学界でダイアスポラという言葉が大はやりで、移民という言葉がはやらなくなっている。特定の地域に縛られない人間のあり方に関心が集まっているということだ。東南アジアというものを考えてみた場合、例えばチャイニーズがそこでいま大きな役割を果たしていて、これと地域とをどう辻褃を合わせて議論したらいいのか。その辺りのことを追ってゆくのが一つの手掛かりになろう。日本人自身もダイアスポラ化しており、国外に暮らす人も、現地に腰を落ちつけないで常に東京ばかりを見ている、というステレオタイプばかりではない。一方には、日本人が現地に腰を落ちつけ、日本を代表してというより、個人として影響力を及ぼしているといった状況も出てきていると思う。人間とその地域の発展の論理をどう結びつけるかに、一つの手掛かりがあると思う。

古川 「発展の地域性」、世界にこれを極めて真剣に考えている人が原さん以外にもう一人いる。「発展の地域性」があることは間違いない。それをいま刀のつばのように使って切り結んでいるマハティールがいる。ヨーロッパ、アメリカが、二挺拳銃か機関銃をぶら下げて入ってくるのにどう抵抗するかというところで、発展には地域性があるのだと、

待ったをかけている。これは大変おもしろい現象だと思う。明治のときには、日本は砲艦外交に対して、富国強兵で対抗しようとした。文化、資本、労働力の支配、そういう恰好でやってくる勢力は強い。これにどうやって抵抗するか。発展には地域性があると彼が主張するのは、つば競り合いをするつもりなのだ。そこで彼が挙げているいくつかの主題は、経済だけではなく、ヨーロッパの個人主義、あるいは民主主義というものを、そのまま汲むのではなく、我々の持っているアジアの伝統を探して、頑張ろうと言っている。ヨーロッパのいう個人の自由よりも、団体の安定が重要だと考える我々に合うように、米国型の民主主義を修正しなければならないと言っているわけである。

論議の進め方として、例えば「発展の地域性」というテーマでマハティールをここへ呼んで、こっちは二派に分かれて、マハティール賛成、マハティールくたばれと議論をやってみたら、相当内容的にも道筋的にも問題ははっきりしてくるのではないかという感じを受けている。

高谷 古川さんの続きでいうと、確かにいま二派あると思う。地域研究と経済学の緩やかな結合、この下に隠れている固有なもの、上に被っている普遍的なもの、その二派に分かれており、まだ切り結んではいないが、それをやろうではないかと言われた。これは本当におもしろいと思う。

関本さんが地域はもうだめだと言っておられる。関本さんは固有性もあるがそれは全てバナキュラーなものが権力によって規範化されてできるものであると言われた。そういう運動の変化の中で、固有性は捉えられるわけであり、一方ではそうではなく、やはり地域には固有のものがあると言う。こういう二派がある。結論から言うと、普遍派の方もバナキュラー派、あるいはモダンワールドシステム派も、3つくらいの地域に分けられると言っている。普遍論理からいっても3つくらいの像に分かれるわけである。マハティールの論点は、内には内の固有性がある。アメリカとは違ふし、ロンドンとも違ふと考えてもいいのではないかということである。

余語 地域研究というのは、個別研究から始まり、ある一つの地域に対する知的探検のようなものがあつたと思うが、最近是比较研究の方に延びてきている傾向がある。比较研究になると面倒で、比较のための普遍的基準、加納さんの言われた目線のようなもの、共通の目線を置かないといけない。だから普遍的なクライテリアか視点を持てば、地域の比较研究は簡単になるが、ここで発展というものを比较の基準、目線として置かれたところに非常な難しさがあると思う。発展というのは3つの再生産メカニズムを含んでいる。一つは人間生命の再生産、もう一つは物の再生産、もう一つは自然の再生産と、これらが発展である。国家がモニターしたいのが、そ

の3つの再生産である。

ところがその再生産は、トレードオフ関係でどうにもならないのが実態であり、そのトレードオフにある3つの関係を統合しようというので、一つの社会システムが真ん中に、国家が頂点に、そして家庭という社会単位が一番下に連なって、何とかしようとしている。「発展」を地域研究の比較基準としたときに、人間生命の再生産をおくと生活世界、あるいは生計という、そういった単位がある。物の再生産を発展というもので捉えたとすると、市場システムというものがある。自然の再生産には風土という単位が出てくる。だから発展というものを普遍的な地域比较の基準とか、目線として捉えると、生活圏、市場システムか市場圏、風土的な地域という3つの地域を統合する枠組みを作る必要がある。それを地域社会システムと呼ぶ場合もあると思うが、そういうものをアイデアとして持たないとなかなか大変だと思う。

ただ発展というものを表題に出したときには、歴史と文化というものを、そういった地域社会システムの中に反映させることによって、発展を歴史的、文化的帰結として陥る危険を避けることができる。

桃木 加納さんの報告で、古い文明の中心地域での食糧不足状況が説明されたが、必ずしもそうではないという意見も出ている。例えば、中国とか南シナ海世界を見ると、加納さんが1870年代以降のものとして指摘された特

徴がプロト的な形態では18世紀、あるいは17世紀からできている。1870年代以前の植民地支配の形態としては、旧中心地域からの周辺的搾取ということでは言われたが、それについても例えば、18世紀にすでにベーカーのいう新産業地域、あるいは新食糧生産地域というのが、かなり東南アジアに現れてくる。

アーリーモダンの時期をどう捉えるかについて、上田さんの話に少しつけ加えたいことがある。中国史の黒田明伸さんが16～17世紀に銀が世界中をぐるぐる回る頃、諸地域の対応の違いを中国、東南アジア、インド、西アジアなどで比べるという研究をしている。ザ・ワールドシステムには入らないものとして考えられているような東アジア、東南アジア、東アジア大陸部でも、銀が回ったことへの対応として、いろんな開発、発展を含めた模索がされている。その中で自然、環境を維持していく方向での対応の模索というのもあったと思う。

中里 フロアーの方々のご意見を伺いながら、この研究会はこういうことだったのかということ初めて納得した。我々社会経済史をやっている人間として、今日のようなテーマを受け止めるときに、その受け止め方としては、比較社会経済史的な観点から話をすることを期待されているのかという感じがあった。それについてはいろいろな伝統があり、日本では大塚史学があった。そんなことを考えながら、自分が考える糸口として思いついたの

が、全くの偶然だが、斯波さんがレジュメで示されたアメリカの社会学の系統の中でマクロヒストリーをやる人達のことである。彼らはかなり大きな目線でもって世界史の比較研究をしている。例えば、スコッチポールである。彼らの議論の中では、どういうふうにしてユニットをとるか、比較するときには共通点を見つけないと比較にならないが、どういう共通点をとれば、意味のある比較ができるかという議論はかなり精密になされている。加藤 イスラム世界において、国家権力は経済、とりわけ市場経済にどのような感じを持っていたのかという原さんの質問に答えたい。おそらくそこで指摘された国家とは法体系などの諸々の制度を含めた社会全体の中の権力のあり方であろう。この原さんの問題提起の意味はよく分かるが、そのような議論をする場合にはユニットを設けたら、おそらく議論は紛糾するのではないか。歴史をやっていると、たとえ比較を念頭に置いているときでも、必ず史料から出発することになるが、文化人類学をやっている私の友人などは違う形で、つまり概念から出発する。私の場合には、史料から出発し、それを抽象化して説明する過程で、自ずから比較の材料が出てくると考えている。

そこで本日は、ヘロドトスの歴史叙述から出発し、そこからエジプトの地域性を抽出したわけである。私の報告では、国家というものを強調したが、市場の国家権力との関係を

述べたのであって、国家と市場を二項対立的に捉えようとは思っていない。その他、市場の運営には社会構造とか家族制度などが決定的に大きな意味を持っていたのであり、この点についても指摘してみたかった。

ともかくこんな大きなテーマにおいて概念とかユニットを決定してから議論を始めようとする発想が私にはわからない。具体的事実から出発し、それを抽象化していく過程において、共通項を見いだす努力を積み重ねるべきである。

原 何をこの重点領域研究がやっているかも説明せずに、報告を引き受けていただいたのである。まっさらなまんまぶつけてもらった方が面白くなると思ったからだ。ある程度その意図は成功したと思う。最後に加藤さんが上手く言ってくれたが、「発展の地域性」すべてを定義したら何も議論ができなくなる。これからもこの「発展の地域性」ということを考え続けることで何らかの見通しが出てくればいいと思っている。

古川さんや高谷さんが言ってくれたこの「発展の地域性」は重要な課題になってきている。例えば、アメリカの普遍主義といったが、APECをPAFTA、つまりアジア太平洋自由貿易地域に変えようというアメリカのエコノミストの論文に、以下の記述が出てくる。「発展途上国であれ、先進国であれ、区別せずに世界中同じルールでいこう」という。アメリカの考えている普遍主義の自由貿

易下では、それがアメリカのプレイヤーもアジアのプレイヤーでも同じプレイングフィールドにのぼって競争しないとイケないはずである。そのためには労働基準と環境基準を守らせる強制力を持つ国際機関を作るのだ。これは、クリントン政権にかなり影響力のあるエコノミストの書いたペーパーの中にある記述である。1995年度秋にはAPEC会議が大坂で開かれる。こういう争点が現実の場にもち出されているという現実がある。そういう大きな文脈を念頭に置くとき、「発展の地域性」を議論することがまさに必要ではないかと思っている。

エコノミストは無駄がきらいである。エコノミスト唯一の命題は、資源の最適配分である。経済学の議論を詰めると余裕がなくなる。無駄があってはいけないということになる。しかし「発展」というような現象を見るときに、少し余裕を持って、ゆっくり見てみるというような知的な態度が必要となってこよう。

最後にもう一度言うと、「発展の地域性」を論じ続けることに意味があるのではないかとということで、今日の会を閉じさせていただきたい。

坪内 大変勉強になった。使った辞書はいろいろ違うし、同床異夢ということもあるかと思うが、それにもかかわらず、この機会に経済を志向する方々を主として、「地域研究」という言葉が議論されたということは画期的であると思う。

我々の重点領域研究はまだ残り2年間ある。2年間しかないとも言える。出発点に比べると、とにかく議論の始まりが起きている。来年3月には「生態と環境」を取り上げてシンポジウムを行う予定である。これもまた辞書の違うところで苦勞をすることになるかと思うが、とにかくどこでも「地域研究」ということばを使いながら、議論を重ねていきたいと念願している。今後ともご協力をお願いしたい。